オリザニア　球団記者体験　2018 年８月 30 日

子どもたちの夏休みが間もなく終わろうとしている８月 30 日。子どもだけが楽しい夏の思い出を作るのではなく、大人にも楽しんでもらおうとオリックス・バファローズが企画した体験型イベント「オリザニア 2018」。グラウンドキーパー体験、スタジアム DJ 体験、Bs　Girls との花道体験、球団カメラマン体験など多岐にわたる「普段、絶対できない体験」の中からで、私は球団記者体験という天と地がひっくり返っても絶対にできない体験に参加することに。

残暑というよりもまだまだ夏本番のような京セラドーム大阪の集合場所に集った幸運な参加者は１０名。これから何が行われるのか不安も入り混じる中に現れたのは球団の名物広報花木さん。球団記者体験は花木さんがエスコートにて執り行われるということで、それだけであり得ない。これから起きることが全く分からず緊張感に包まれる中、花木さんの軽快なトークで徐々に緊張が解きほぐされ笑顔になりつつある参加者たち。

まず案内されたのは観客席中央上段指定席よりもさらに上段に位置する記者席。各新聞社のネームが付いたテーブル。ここで戦況を眺めているのかと思いを馳せつつ、フィールド内に目を移すとすでに選手たちは練習中。記者席の番人たちはフィールドやその他の場所で取材活動に精を出しているのかまだ不在。記者席はフィールドからは近くはなく、この眺めで試合経過を記事にするのは私には難しいことだなと想像する。

続いてのあり得ない体験はフィールド内ベンチ前でのバファローズ選手たちの練習を見学。いつもテレビ越し、フェンス越しで拝見する選手たちはとても大きく凛々しく圧巻である。試合中とは違う選手たちに見とれていると、選手が目の前を通る。その瞬間、息が止まり、「あっ、選手が目の前を通った。」と３秒ほどたってから気づく。そうやって舞いあがることを繰り返しては、今日は球団記者ということを忘れ、静かに舞い上がるファンと化す。花木さんから「今日は記者やで。」と言われても無理なことでした。

練習見学はバッティング練習タイム。様々な選手がトスバッティングやフリーバッティング、ストレッチなどをする中で印象に残っているのは福田選手と吉田正尚選手。隣り合うブースで同じような順番でバッティング練習を行っていたが、二人の練習はとても対照的な光景でした。

レギュラー定着を目指す福田選手はバットの振り方やフォームなどをコーチに確認しながらバットを振る。他の選手とあまり多く言葉を交わすことなく、一瞬一瞬を無駄のないよう取り組む姿からはレギュラー定着を目指し取り組む必死さと一生懸命さが伝わってくる。その日もほかの選手より早くスタジアムに現れ、練習に取り組んでいたとか。福田選手のその姿に某他球団チーム広報さんの記事で読んだレギュラー定着を目指し日々努力する若手選手と重なる。その選手も近頃徐々に結果が出始めている。コツコツと積み重ねた努力は発

する言葉からではなくプレーや姿勢からしっかりとファンに心に伝わるもの。福田選手のひたむきな努力が実を結ぶ日が来ることを願い応援しようと思いました。

　その隣でバットを振り、快音を鳴らすのが吉田正尚選手。３年目とはいえ、チームの主軸として活躍する吉田選手からは貫禄やオーラが感じ取れる。トスバッティング、フリーバッティングでも一振り一振り確かめ、時にコーチにも確認をしながらバットを振る吉田選手。ひたむきさや緊張感が漂う練習の中でも、時折ファイターズの選手と言葉を交わす際はリラックスしている様子さえうかがえた。花木さんより「吉田選手のフリーバッティングは見もの」と教えられる。軽々と外野スタンド上段に何度もボールを運ぶ光景はオールスターゲームのホームランダービーと同様の光景だ。あの時、軽々と外野スタンド上段にボールを運ぶ姿に他球団のファンだけではなく、全国の野球ファンに「オリックスの吉田正尚」の存在感を示した。今回も同様の光景を見て気づいたことが、吉田選手のボールがバットに当たる瞬間の音の心地よさ。樹木が発する本来の音であろうかとても良い音が鳴る。バットの芯でボールを捉えているのがよくわかる。音だ。同じことを日ハム在籍時の大谷翔平選手の打席でも思った。

　バッティング練習に取り組む福田選手と吉田選手。「ひたむき」に取り組むという言葉は同じでも、そのひたむきさは全く違う空気感で対照的であった。

　その後、入団会見や表彰などがあった場合に使用されるインタビュールームへ。

　まず、報知新聞の原島記者のトークショー。普段の仕事の流れ、選手への取材で気を遣う点など番記者ならではのお話。報知新聞はオリックス担当の記者は１名しかいないらしく、日々長時間にわたる取材活動ご苦労様ですと声をかけたくなる。原島記者退室後、その様子を見ようとライバル他社の記者さんたちが原島記者の様子を確認しようと入室。ライバル紙の記者という立場ではなく、横並び時には助け合い仕事をされていらっしゃるのだろうなと想像できました。その温かい雰囲気からオリックスらしさが感じ取れた。

　そして、最後は近藤大亮投手を囲んでのオリザニア特別記者会見。
　この時直前までどの選手が来てくれるのか教えてもらえず、花木さんより各記者１問必ず質問するようにという指令。「好きな食べ物は？」という質問でもよいという話であったが、いざ近藤投手が目の前に現れると各記者しっかり質問できるもの。
　MOP（もっとも大阪らしいプレイヤー）に選ばれたらしい近藤投手。大阪生まれ大阪育ちで、ずっと大阪のチームでプレーをしており、大阪人らしく陽気な気質で近藤投手の人柄に魅了された人は近藤沼にはまると言われているとか。そのような逸話がある近藤投手へのインタビュー。

　　大阪のよさの質問に住んでいる人の良さ、住んでいて楽しいという「大阪らしい」近藤

投手の回答。これ書いておいてね、と強調したことは京セラドームが好きということ。社会人のころにも何度も経験した京セラドームでのマウンドはプロに入ってからのほうが応援で背中を押されているということ。また、ドーム球場と屋外球場での違いは特に ZOZO マリンスタジアムでは変化球の曲がりが違うということで、打ち取るスタイルの投球をしている近藤投手は ZOZO マリンならではの風を計算に入れているとのこと。（今度、そのあたりを意識して観戦しようと思います。）

また、９月は一戦一戦どのような場面においてもいけるよう心の準備をし、与えられたイニングはしっかり押さえていこうとの意気込みを答えていました。

ひとつひとつの質問に誠実かつ丁寧に答えてくださった近藤投手。最後は大阪らしいポーズということでグリコポーズでの撮影会ののち、模擬記者会見は終了。近藤投手の温かな人柄にさらに近藤沼にはまった記者は少なくないはず。ファン感謝祭で素敵な筋肉を拝見するのを楽しみにしております。

終始「あり得ない」体験ばかりの球団記者体験。最後は花木さんとの撮影会にてお開き。激戦のチケット争奪戦を経て幸運にチケットを入手し、何をするか全く想像もできないまま迎えた当日。球団の方々はファンに喜んでもらおうといろいろと準備をし、我々に他ではできないこれ以上にない極上の経験を提供してくださった。ぜひともまた参加したい、球団関係者の方々よろしくお願いします。（でも来年はチケットを取れる自信がない。）

花木さんをはじめ、球団広報関係者、営業部、そしてオリックス・バファローズ球団関係者すべての方々へ、「ありがとうございました。」。

その後、９月５日鎌ケ谷スタジアム。イースタン・リーグ ファイターズ対ベイスターズ戦。マスコットカビーに会うために大阪から鎌スタまで遠征した私は、オリザニア球団記者体験９人の中のおひとりに偶然再会できたことは奇跡という言葉以外みつからずでした。

オリザニア球団記者
土生川　梨加